19

幕末維新期の蘭方医関島良致の生き方

青木歳幸

近年の蘭学研究において、幕末から明治にかけての在村蘭方医の潮流が明らかになりつつあり、彼らが地域医療の近代化に果たした役割もまた解明されつつある。また、地方政治、とくに民権運動に貢献した蘭方医の活動の解明もすすんでいる。しかしながら、地域における殖産興業での蘭方医の役割については、まだまだ未解明の部分が多い。そこで本報告では、名古屋の柳田良平門人で、飯田の蘭方医関島良致の軌跡を手がかりに、幕末維新期の地域実学の実態解明の手がかりをえたい。

関島良致は、文化三年（一八〇六）に飯田に生まれた。幼名退蔵。二〇歳の文政八年（一八二五）、江戸の三樹軒龍川の門に入り医学を学ぶ。文政一〇年江戸から帰り、下川路村医師関島良輔（良基）の養子となった。同年九月開善寺江西和尚に従い京都に行き、宇津木昆台に入門。翌年九月二九日帰郷。同一二年、養父より家法医方を皆伝されて開業。天保二年（一八三一）七月、伊豆木小笠原家訪問の尾張藩儒者丹羽盤桓に従い名古屋へでて、柳田凌雲（良平）に医学を学び、ついで水谷豊文に本草学も学んだ。天保四年、養父死亡により家督相続。天保九年長崎に遊ぶ。天保一二年には、勧進元の一人として江戸の市川海老蔵による芝居興行を下川路村へ招致するなどの文化面でも活躍した。弘化三年、長男年太郎（良載）を伴い名古屋へ行き柳田塾へ入れる。弘化四年に、阪谷朗廬の飯田来遊に同道した。嘉永三年（一八五〇）医道長上丹波氏から信濃飛驒両国門人総取締役とされた。

関島の蘭方医としての業績は、安政七年（一八六〇）、師柳田凌雲（良平）訳『内科新説伝染霍乱説（コレラ病）』を刊行し、さらに、同年には、息子の良載に柳田凌雲訳書『医方要略』を出版させたことであろう。元治元年（一八六四）に良載が死亡したため、再び治療施薬を開始している。

明治五年（一八七二）のウイーン万博への各地方の物品

提出にあたり、関島と飯田町の元飯田藩医丸山龍眠が、産物取調方世話役に任ぜられた。世話役の選考に、物産にくわしい人物が選ばれていた。他の地域でも同様に蘭方医が関わった例が見いだされよう。

世話役となった関島は、万国博覧会を「御国内限ニ無之外国へも御差送之義、御国体へ相拘り候義」として、物産の収集が世界につながる活動であると認識していた。関島は、自己の本草学・博物的知識と名主を動員して、三五か村から九〇件の産物を収集した。また関島は、飯田地方の古器物収集家とのネットワークもあった。関島の寺子屋門人で、桐林（竜丘村）の岡村立伯が発掘した古鏡にも解説をつけている。明治六年医業を休止し、翌年、医業のかたわら四八年間にわたって開いた寺子屋を閉じた。明治二一年一二月三〇日没、八三歳。

関島良致がかかわったウイーン万博のための産物収集は、以後の博覧会への出品の基礎データを提供した。また明治一一年の天皇行幸の際の展覧御物として出品された地域の産物は、幕末から明治初期にかけての地域産業の曙を示す資料としても位置づけられよう。

ウイーン万国博覧会以後の内国勧業博覧会が、殖産興業と産業の近代化を促進したといわれている。各地のウイーン万国博覧会の物産取締役らの動向、そこに関わった蘭方医らをさぐることで、奇物・博物学収集から勧業博覧会、共進会等への産業の近代化の動きと蘭学とのかかわりも照射することができるのではないか。

（長野県上田高等学校）